

## 研究ノート

英米文学系学会におけるワークショップ方式による  
共同研究の実践記録

——日本アメリカ文学会北海道支部

「第4回若手研究者のためのワークショップ」の準備過程——

上西哲雄

## 目次

- I. はじめに——実施にいたる経緯
- II. 第一回打合せまで——概要とスケジュール
- III. 第二回打合せまで——作品選定と担当者決定
- IV. 第三回打合せまで——発表原稿の作成
- V. 発表原稿へのアドバイス——直前の一週間
- VI. 当日——直前の打合せと本番
- VII. おわりに——総括と課題

## I. はじめに——実施にいたる経緯

本稿は2006年3月4日(土)午後3時より6時まで、藤女子大学を会場に日本アメリカ文学会北海道支部第115回研究談話会として行われた「第4回若手研究者のためのワークショップ」の準備の行程を記録するものである。

日本アメリカ文学会北海道支部(以下「北海道支部」)主催の「若手研究者のためのワークショップ」は、ベテラン研究者がコーディネーターとなり、院生・学生を中心とする若手研究者に発表者・コメンテーターになってもらうワークショップに、定例の研究談話会の一回を当てるといった形をとっている。2003

年より始めて今年で4回目を迎えた。

今回は次の者が発表者、コメンテーター、コーディネーターを務めた。発表者：井出達郎(北海道大学大学院修士課程二年)、藤田大憲(北星学園大学大学院修士課程二年)、中野辰彦(北海道大学大学院修士課程一年)、コメンテーター：本莊忠大(旭川工業高等専門学校教員)、藤井光(北海道大学大学院博士課程二年)、コーディネーター：上西哲雄(北星学園大学教員)である。(いずれも当時。なお以下では資料によって「発表者」を「報告者」と呼称する場合もあり、これは当時の筆者の語用の混乱によるが、そのままにした)

こうした試みを北海道支部が始めたきっかけは、北海道にゆかりのある立教大学教授渡辺信二氏を北海道支部の研究談話会に招いてお話をさせて頂くという企画から始まった。交渉の過程で、むしろ渡辺氏が日ごろ演習で行っている教育を再現して頂くことは出来ないかということになり、道内大学の院生・学生にも声をかけてワークショップを開くこととなった。氏はテキストとして詩を数編選んで北海道支部の会員に告知した上で、発表者に決まった学生・院生とEメールによって連絡をとり、前段階としての議論を重ねた上で、当日のワークショップでの議論に臨むという形を

---

キーワード：ワークショップ、若手研究者、アメリカ文学、アメリカニズム、1920年代

とられた。

当日のワークショップの進行状況は参加した者にとって刺激的であった。毎年継続して行いたいとの声に押される形で有志が実現のために動き、毎年2月ないし3月の北海道支部研究談話会をこれに当てることが暗黙の了解となった。翌2004年は元北海道大学教授・中京大学教授の片山厚氏、2005年は札幌学院大学教授の岡崎清氏、2006年は北星学園大学教授の上西(筆者)がコーディネーターを引き受けて実施してきた<sup>(1)</sup>。

このようにして始まった北海道支部のワークショップは、支部活動の活性化を目指して始められたものではなかったが、毎年継続を望む声があがっていること自体が活性化の表われと評価することができる。

こうした北海道支部の動きと直接には関係の無い形で、日本アメリカ文学会本部は学会活動の活性化を目指して2005年10月の全国大会(会場:北海学園大学)からワークショップを大会行事のひとつとして新たに導入した。アメリカ文学会の基本的な理念に従う形で、本部が主導権を握るのではなく、会員からワークショップを募集し、大会期間中にプログラムの中に時間と場所を提供するというものである。初年度でもあり、ワークショップ実施の申し込みがし易いことを考慮して、「シンポジウムも含めて」、形式は自由なものとして、ワークショップとは何かということは、ひとまず問わない形となった。

この結果、計3本のワークショップが開催されたが、開催の意義に議論の余地を残している。日本アメリカ文学会全国大会ではこれとは別に毎回2本のシンポジウムを開催しており、シンポジウムにおいてもフロアとの質疑の時間が必ず設けられていることを考慮すると、席の配置以外にワークショップがシンポジウムとどのように違うかが明確ではなかったのではないだろうか<sup>(2)</sup>。

日本におけるアメリカ文学研究の学会では、

日本ヘミングウェイ協会が大会や例会においてワークショップを実施している。そのワークショップがワークショップとして機能しているかどうかについて、筆者には必ずしも判断のつきかねるところがあるが、むしろ同協会が実施する「ワーク・イン・プロGRESS」という方式が、従来の研究発表やシンポジウムとは異なったものを目指していて興味深い。それは、コーディネーターと発表者にそれ以外の参加者が数人加わって構成され、発表者が萌芽的な議論を発表してそれを叩き台に参加者全員で議論をするというものである。若手研究者の中には完成度の高いものを持ってくる者もいるが、多くは研究の途上の状態で持ってきて参加者に意見を出してもらおうというものである。発表者以外の参加者の視点に立つと、議論の種をもらって議論をする形になっている。

北海道支部に最初にワークショップを持ち込んだ渡辺信二氏の方式も、実に8人の発表者を用意し、互いに批評することを義務付けるというように、議論が交錯することが目指されていた。完成原稿を用意した発表者・発題者とフロアとの間の1対1の対話ではなくて、未完成の原稿に基づく議論の交錯がワークショップの眼目のように思われる。

以上の両者に共通する点は「教育的」であることである。いずれも、発表者がそれまで準備して来たものを発表時点で完成と呼べる水準まで持って行き、その成果の評価を受けるというものではなくて、ワークショップの場を、自らの研究に質問の形を含めたアドバイスをもらい、完成と呼べる水準まで持って行くための援助を受ける場として考えていることである。

さて、時期的にはこの全国大会での経験を踏まえた同年12月に、北海道支部において筆者は翌2006年2/3月期の談話会で第4回「若手研究者のためにワークショップ」をコーディネートするように要請されて引き受ける

こととなった。ワークショップのあるべき姿について筆者に明確な主張があるわけではなかったが、日本アメリカ文学学会全国大会での経験に上記のように学び、またこれまで3回の北海道支部での「若手研究者のためのワークショップ」において何が好評であったかを考えた上で筆者がまず大切にすることは、少なくとも実施の狙いや方法を明確に意識的なものにし、実施する方式の特質を見えやすいものにしようとしたことである。本稿が目指すものは、それを記録することによって、英米文学系の学会におけるワークショップの実施のよりよい方法を考えるひとつの材料を提供することである。

なお、以下では上西が様々な形で参加者に送った資料のうち、ワークショップの準備の方法に関するものを本文に引用し、参加者達が上西に寄せた内容に関するものの一部を後掲の注記にした。本文によってワークショップの準備過程が明確に判るようにし、具体的なやりとりは(紙幅の関係で多くは省略した形であるが)注を参照するという形をとった。これら注記における資料は上西以外のメンバーによって作成されたものであり、作成者による合意の上で作者名を明記して掲載する。

## II. 第一回の打合せまで——概要とスケジュール

12月の北海道支部からの要請を受けて、筆者はまずワークショップのテーマを考えた。筆者自身の研究上の関心(筆者に要請した時点で、支部はテーマが筆者の研究上の関心に大きく影響されることを前提としているものと思われる)と近年のアメリカを巡る学会や一般社会の関心を考慮して、「国家の自意識—1920年代アメリカ」とした。一方、ワークショップのコメントーターの役割を北海道支部の若手研究者の中から本荘忠大、藤井光に要請し、テーマ、テキスト、発表者の人選をふたりに

相談した。構想がほぼ固まった12月26日、全体の構成を上記のふたりに、発表者三名を加えた計5名に送付した<sup>(3)</sup>。そうする一方で、Eメールによる自己紹介を全員で行うように促した。

最初にメンバー全員で行った打合せは、翌2006年1月14日(土)に北海道大学言語文化部で行われた北海道支部研究談話会の前であった。お互いにあらためて自己紹介を行ったあと、上西が(1)ワークショップなるものについての理解、(2)ワークショップ当日の進行計画、(3)当日までの作業のスケジュール、(4)テーマ、(5)テキストの候補についての上西の考えを説明した。(この時配布した打合せ資料そのものは、ここでは割愛)その後、各項目についてメンバーの共通理解を作成するべく討議を行った。

(1)については、概ね上記のような上西の意見を述べて了承された。

(2)の当日のスケジュールについては上西が次のような案を提示した。

- ①上西から、趣旨の説明、手順の説明
- ②報告者による報告(井出、藤田、中野)  
+藤井さん(大統領演説について、それほど分析的でなくとも良いので紹介のような報告を。もちろん、分析を加えて頂いても結構です。読んでみて必要ないということになるかも)
- ③報告者同士のコメント(井出、藤田、中野)
- ④コメントーターによるコメント(本荘、藤井)
- ⑤報告者による応答(井出、藤田、中野)
- ⑥報告者、コメントーターによる「応答」に対するコメント
- ⑦オープン(院生を優先的に)
- ⑧謝辞(上西)

このうち②で「大統領演説」の報告については、資料としては打合せ当日1920年代の大統領就任演説が上西から、後に本荘から

Theodore Roosevelt 大統領のアメリカニズムに関係する演説がメンバーに配布され、資料として利用する者もいたが、時間の関係や議論の進行をスムーズにするために報告に盛り込むことはしなかった。また、⑦のフロアでも交えた議論については、北大の大学院生に当日の出席と議論への積極参加を呼びかけることは確認したが、実際に当日大学院生に優先して意見を求めることはしなかった。

(3) については、上西から次のような案が提示された。

① 1月31日(火) までに

今日決めたテキストそれぞれを読んで、概要書の趣旨の視点\*から問題点をおおよそ10個以上挙げて上西に送ってください。(これはコメンテーターも)

\*当時のアメリカ人がアメリカ合衆国という国に対する国家意識、あるいはそこまで明確ではなくても、集団的なアイデンティティに対する意識はどんなものだったかについて考える。

② 2月4日(土) までに

上西が編集してみなさんに送り返します。

③ 2月15日(水) までに

それぞれの作家の作品から、概要書の趣旨の視点から見取り上げるのに良いと思われる作品をひとつずつ選んで、理由(400字くらいにまとめて)をつけて上西に送ってください。(すみません。これもお手本という意味で、コメンテーターも御願います。)上西が出来るだけ早く、編集して送り返します。

遅くともこの頃までにテーマを最終決定しましょう。皆さんの確認がとれたら、事務局に連絡します。

④ 2月20日(月) 頃までに

メールのやりとりを通じて作品を本決定しましょう。基本的には報告者の意向を尊重しますが、コメンテーターのお二人も、是非積極的な意見を述べてください。

⑤ 2月20日(月) 以降の出来るだけ早い時期に、担当を決めましょう。

しかしながら、3月4日のワークショップ当日までに北海道支部会員へテーマ、テキストを周知する期間がこれでは短すぎるとの判断から、スケジュールは前倒しして行われることになる。手順はこの通りで実施された。

(4) のテーマについては、上西が前もってメンバーに配布しておいた概要書に加えて、Walter Benn Michaelsの著作の一部や中村亨の論文を配布して説明し、その場でメンバーの討議に付した。その結果、上西の当初案「国家の自意識-1920年代アメリカ」を修正して、「アメリカとは何か——ロスト・ジェネレーションに読む」とすることとした。

(5) のテキストについては、上西は次のようなものを候補として提案した。Hemingwayについては、"The Battler" (1925), "Wine of Wyoming" (1933) "Indian Camp" (1925), "The Doctor and the Doctor's Wife" (1925), "Ten Indians" (1927), "Fathers and Sons" (1933), "Ten Indians" (1927), "Fathers and Sons" (1933) を出した。Fitzgeraldについては、"The Ice Palace" (1920), "The Diamond as Big as The Ritz" (1922), "The Swimmers" (1929) をあげた。Faulknerは"Red Leaves" (1930) "An Odor of Verbena" (1938) を出した。候補を一作ずつにするか二作にするかも含めて討議した結果、各作家二作ずつに絞り、全員ですべて読んで絞込みのための作業を行うことにした。それぞれの二作は以下の通り。Hemingway: "Wine of Wyoming", "Fathers and Sons". Fitzgerald: "The Swimmers", "The Diamond As Big As the

Ritz”。Faulkner: "Red Leaves", "As Odor of Verbena"。

以上の討議を踏まえ、まずは2月半ばを目標に、作品の絞込みの作業を行うことにした。そのために、まず担当を決めずに6つのテキストを全員が読み、それぞれの作品について10個以上の問題点を出し、それを上西がまとめて全員に送り問題点を共有した上で、各メンバーが各作家から一作を対象テキストとして理由書をつけて選ぶという作業を行うこととした。

### Ⅲ. 第2回打合せまで——作品選定と担当者決定

上記の問題点についてはコメンテーター、発表者の全員が予定通りに上西に寄せて来て、上西はそれをまとめた上で2月6日に各メンバーに送り返した<sup>(5)</sup>。このように各自の出した問題点を全員で読みあうのは、同じ問題意識の中で今後作業を進めていくためである。最終的にテキストを何にするかを決定する場合も、共通の問題意識の中で意見を交わしながら作業を進めることを目指した。こうした趣旨のもと、問題点を各メンバーに送付する際に、次のような文章をEメール本文に書き込んだ。

お忙しい中を、非常に良い問題点を出してくださって有難うございます。

これで、議論を作っていく材料が十分に出来たと思います。

問題点について一言申し上げれば、あげていただいた問題点はどれも無駄にはなりません。頂いた問題点は議論のスタートとしての問題点としても使えることはそうですが、それだけにしか使えなくて、そのために拾った問題点以外の問題点は捨てることになるのではありません。問題を解決し、それが別の問題点につなが

て新たな展開となるという意味で、問題とその解決の連鎖で議論が出来上がっていくということも、あります。また、これが一番重要なのですが、問題点としてあげてもらったものは、たとえば、「～とは何か」という問題点は「～である」と書き換えれば、事実として議論の材料に使えます。これは「～はどうーしているか」を「～はーしている」と読めるし、「～はどのような効果を生むか」は「～が目立つ」とも読めるし、「～ということには何か意味があるのだろうか」は「～ということである」、「～した原因は何か」は「～した」とすれば、それぞれ問題点というよりも、みなさんが気になった事実に変身します。問題点を拾うことで皆さんは、要するにひっかかることを拾い出したのだということです。

こうして送付された問題点の取り扱い方について、メンバーから質問が出た。上西はそれに対して次のような返信を全員に送った。

「他の人の問題点を参照してよいか」というご質問があったのですが、理由を書く際には、もちろん他の人の問題点を参照にし、もう一度作品を考え直し、その上でどの作品が取り上げるのに面白いかを考えて決めてください。

自分の拾い出した問題点だけで考えようとすると視野が狭くなってしまいます。すでに作品を読んで、問題点を拾いながら自分ならこんな風を読むというイメージを持った人もいるかもしれませんが、それを当日に発表されても、お会いした時に申し上げたワークショップの趣旨とは違いますよね。

まずはみんなの問題点をざっと見て、自分ならどのくらい多様な、かつ深い議論が出来るか考え、それを理由としてま

とめるように考えてください。

他の人のあげた問題点について「これは凄い、自分には気がつかない」とがっかりした人は、実は頭が柔軟で、議論の深みや広がりを作ることの出来る人です。私のように長くこういう世界にいと、ついつい自分の考えに固執してしまうので、こういう機会に皆さんの柔軟なご意見に触れさせて頂き、自分の脳の活性化を図ります。

皆さんも若年寄にならないように、常に自分の思い込みを否定しながら、新しい可能性を探しまくってください。

互いに出し合った問題点を参考にしながら各メンバーはそれぞれの作家について1作品ずつを選定して理由をつけて上西に送り、上西はまとめて2月11日付けで各メンバーに返送した<sup>(6)</sup>。その際に、メンバーのうち特に発表者の3人に対しては返送された選定結果を見て、もう一度自身の意見を寄せるように促した。<sup>7</sup> 以上の結果を踏まえて上西は選定作品、担当者の案を作成し、2月15日付けで各メンバーに案を披露して意見を求めた。最終的なメンバーによる選定結果は以下の通りであった。

①Hemingway

"Wine of Wyoming" : 中野, 藤田, 本荘

"Fathers and Sons" : 井出, 藤井

②Fitzgerald

"The Swimmers" : 中野

"The Diamond As Big As the Ritz" : 藤田, 井出, 藤井, 本荘

③Faulkner :

"Red Leaves" : 中野, 井出, 藤田, 藤井, 本荘

上西は、特に発表者の意見を重視しつつ作

品選定案を作成し、誰がどの作品を選定しているかを考慮して担当者案を決めた。それは次のようなものである。Hemingway, "Wine of Wyoming" : 中野, Fitzgerald, "The Diamond As Big As the Ritz" : 藤田, "Red Leaves" : 井出。これに対して全員から了承の返事もらった。なお、この案の提示の際に、次のような文書をつけた。

さて、\*印をつけた残りの3作品ですが、会員にはわれわれはこれらを読み検討したことを前もって報告し、これについて会員の中で意見のある人やご質問のある人は歓迎すると言うことで、議論を喚起したいと思います。で、フロアーからこれらの作品についての発言があった場合、皆さんお読みになり、疑問点も拾ったので必ず何か言えると思いますし、自主的に発言して頂くことをお願いしますが、無かった場合に本荘さんと藤井さんにふりますのでよろしく御願いたします。(大統領演説については、こちらからは持ち出さずに、文学テキストに専念したいと思います)

#### IV. 第3回打合せまで——発表原稿の作成

以上のようにしてテキストの選定と担当者を決めた上で、2月15日に事務局にテーマ、テキスト、メンバーの確定情報を送付すると同時に、各発表者の原稿作成の作業に入った。ただし、個人の研究発表やシンポジウムとは異なるワークショップであることを鮮明にするために、原稿作成も共同作業の中で行う方式を目指した。そのために、上記の第2回打合せ資料には次のような文書を入れて、作業の手順を指示した。第2回に引き続き、「打合せ」と言っても、メールによる文書の交換を通じた打合せである。

(1) 2月24日(金)までに、報告者の方は日本語(全角)で6000語前後の原稿を作成して上西に送ってください。

- ・「アメリカとは何か」がテーマなので、そういう方向から議論を作成してください。議論は漠然としたものではなくて、絞った疑問点をテキストの中で探し、それを解決する中で作者のアメリカ観が見える形にしてください。
- ・この頃は「アメリカ観」が大きく変化する時代です。浮かび上がるアメリカ観に矛盾や曖昧なものがあったほうがリアリティがあります。あまり無理やり狭い枠に作品をはめ込もうとせずに、場合によっては新たな疑問で終わるオープンな議論で全く構いません。(というか、その方がベターかも)

(2) 上西が編集して、できるだけ急いで皆さんに返送します。

(3) 遅くとも3月1日までに全員がコメントと質問を作成して、全員に送ってください。

- ・質問、コメントは報告者の議論の土俵から出ないように。「こんな見方もできるのでは」というような、「自分の意見が言いたくてたまらない」型に陥らないように注意してください(当日はそういう意見や質問が怒涛のように押し寄せるでしょうが)、われわれの作業はあくまで報告者の報告を良くするための意見交換です。
- ・特にコメントーターの方は、報告者の議論の方向をよくご理解の上で、その方向に議論を進める上で報告者にとって役にたつコメント、質問をしてください。また、当日も基本的に報告者の議論の枠内のものに御願

いいたします。この段階で出されるコメントや質問から大きく離れるものは、当日控えるようにお願いします。

(4) 報告者はそれを参考にして原稿を修正しても構いません。

- ・ただし、当日は他の報告者やコメントーターのコメント、質問に対して、応答する時間を設けますので、無理に修正せずに、その時に応えるのも手です。

また、発表までの作業について次のような質問が寄せられた。

「3月1日までに全員がコメントと質問を作成して、全員に送ってください。」という文があるのですが、これはワークショップ当日に報告者にコメントあるいは質問する内容と同じものと考えていいですか。あるいは3月1日までと当日に分けて、それぞれコメントあるいは質問を用意したほうがいいでしょうか。(4)のただし書きを見ていて少し疑問に思いました。やはり、報告者の議論を発展させるための建設的なコメントとなれば、準備期間も短いですから、追加のコメントを当日にするとしても同様のものになるだろうと思いますが。

それに対して上西は、次のように返答した。

私としては、3月1日までに送っていたコメントと質問は、当日のものと同じでも構わない、というよりもむしろ、報告者にフェイントをかけないように、当日のものを送って頂くとありがたいと思っています。

ある意味では、コメントーターは前もって報告者の報告をおおよそ教えてもらい、

報告者も他の報告者やコメンテーターのコメント、質問をおおよそ教えてもらっておいて、準備をしましょうというのが趣旨です。

また、当日の配布資料に関する質問がよせられ、次のような回答をしている。

「当日配布するレジュメは、普段談話会などで配布されているような形式、つまり議論の流れと参考資料が掲載されているようなものを用意するのかどうか」との質問を頂きました。

報告者の方に御願した原稿の長さは、お話しされる長さを15分に想定したもので、このくらいなら配布資料無しでいいかなと思っていました。

ただ、やはり15分でもおっしゃったような資料があった方が、聞く人には助かりますよね。で、統一して次のような資料を作成することにしましょう。

- (1) 議論の流れが分かる詳しい目次のようなレジュメを作成する。
- (2) 引用はそこに盛り込む。
- (3) 参考文献表はつける。ただし、みんな議論するワークショップなので、テーマの性質からある程度の時代への言及は避けられないものの、議論の中心はできるだけテキストの内部で行うように心がける。従って、参考文献は限られたものとなる。
- (4) 様式はB5を2枚付けてB4として印刷する。

2月下旬に入って発表者三人から発表原稿案が寄せられ、2月26日に上西がまとめて5人のメンバーに、以下のような最後の「打合せ資料3」をつけて送付した。

「打ち合わせ資料2」にも書いて重複

する部分もありますが、発表当日までに次のような手順でお願いします。

(1) 他のメンバーの原稿を急いで読んで下さい。

①まず、単純なミスも含めて、この原稿を良くするためのアドバイスを箇条書きで作成してください。文章の直しや論理展開の順番、削除した方がいいと思うところ、説明を加えた方がいいと思うところなどをお願いします。

②次に、質問を考えてください。但し、あくまで発表者の議論に沿ったものにして下さい。曖昧なところや論理に矛盾のあると思われるところは必ず出してあげてください。①の修正につながりますから。

③それぞれの発表原稿にコメントをそれぞれ800字以内で作成してください。対象作品に関して、発表者の議論の枠組で発表者が触れていないことについてそれを指摘するのは構いませんが、その触れられていないことを巡っての議論で大部分を費やすのはおやめください。発表者の議論を更に発展させるのは構いません。一番期待されるのは、議論を補ってくれること、議論のポイントやメリットを強調してあげること、議論を更に発展させる種を指摘してあげることなどです。(抽象的で解り難いかもしれませんが、ご理解ください)

(2) 3月1日(水)(の、出来れば午前中に)上西に送ってくださって、上西が編集して皆さんに送り返します。

①本当は更にやりとりをしたいところですが、時間切れです。報告者は当日までに発表原稿を修正して下さって結構です。

その際に、どのように修正するかは



ご本人の自由です。特に(1)の①、②は修正の大切なアドバイスなのでよく読みましょう。ただし、そのまま全て修正する必要はありません。質問やコメントの中で、そのことについては言いたいことがあるという時には、あえてそのことを原稿に盛り込んだりしないで、むしろその質問が出そうように原稿を修正して、その質問を誰かがしてくれることを待ちましょう。

②出して頂いた他の報告者の発表原稿に対するコメントは、メモに作り換えておいてください。

当日はコメントの原稿を読み上げることはおやめください。(報告者、発表者以外の方が原稿を読み上げるというのは、立場をわきまえない僭越なことです)基本的にはアドリブで、しかしメモを参考にするのは構いません。

③コメントーターの方は、ここまで報告者にお付き合いいただきましたが、ここに来てようやくお役ゴメンです。腕が鳴るでしょうが、テキストとこれまでの資料をよく読んで、本番に備えてください。

④報告者の方は、当日の配布資料を準備してください。

- 様式は、B5版を2枚並べてB4版にしてコピーしたもの一枚で揃えましょう。
- タイトルは「日本アメリカ文学会北海道支部」、「第4回若手研究者のためのワークショップ」、「2006年3月4日(土)」、「対象作品名(発表年) by 作家名」(いずれも英文で)、「発表のタイトル」、「報告者名」で構成しましょう。
- 資料内容の基本は、「発表の目次を

作成し、それに、聞いただけでは解り難い言葉、固有名、引用(英文)を、盛り込む」ということにしてください。引用文献は最後にまとめて。

- なお、発表原稿も含めて、対象作品のタイトル、引用は英文でお願いします。

2月27日には、「報告者は皆さまから頂いたアドバイスをもとに原稿を修正する訳ですが、直したものは皆さまにお見せする必要はないのでしょうか」との質問に対して答える形で、上西は次のようなメールを5人のメンバーに送った。

発表者の発表は原稿を読んでもらうしっかりしたものです(ので、みんなをよくするために作業を進めています)。一方、コメントは、本来発表原稿などは見ずに、当日初めて聞いてするものです。それを、お互いに負担を軽くするために前もって一度だけ見せ合います。

コメントーター(および報告者同士)のコメントは、ですから当日は原稿を読み上げるのではなく、メモ程度のものを作成して臨み、発言してもらいます。ただし、報告者は発表内容を変えて来ているので(どんどん修正してください)、発表を良く聞いて、それに合わせてその場で修正してください。

前に、コメントや質問を修正するかもしれないので、報告者と打ち合わせたいというご意見があり、それはもってのほかであるという趣旨のメールをお送りしましたが、報告者が大幅に修正することは、十分にあるので、それをむしろ打合せの中で示してあげると、コメントする人には親切ですね。上西としては、ふたりのコメントーターには、修正した原稿を見せてもらわずに、しかしきちんと報

告者の発表をよく理解して支えるコメントをする練習をしてもらいたいのですが、報告者の方にもコメントを御願ひしているので、困っています。

で、考えたのは、打合せの時に報告者は原稿のコピーを持ってきてみんなに配るということにしましょうか。それを見て、みんなはコメントのメモを、発表原稿の修正の範囲内で、必要に応じて修正しても良いということ。その代わりに、報告者はともかく、ふたりのコメントーターが自分勝手なコメントや質問をしたら、みんなで軽蔑することにしてしまおう。

## V. 発表原稿へのアドバイス——直前の一週間

発表原稿に対して5人のメンバーから寄せられ、3月2日に上西がまとめて全員に送付した。<sup>(8)</sup> その際に次のようなメールを添えた。

さて、報告者はよく読んで、発表の一層のブラッシュアップを。特に、本荘さん、藤井さんの技術的なアドバイスは、さすがにプロの修羅場で研究活動をしていらっしゃるだけあって的確でありがたいですね。実はプロはこういうことを大切にするとということを報告者の方々は肝に銘じてください。

なお、藤田さんからは「アドバイスというよりも質問ばかりです。しかも直接議論に関係ないようなものや、井出さんの議論を読んだことによって新たに出てきた小説への疑問も含まれますが、考えたことを書いてみます。まとまってなくてすみません。」とのコメントつきで質問に集約した形で送られてきましたので、そのようにしました。

それから、頂いたコメントが（特に本

荘、藤井の両氏のは）とても良くて、それを読むなというのがもったいないのですが、やっぱり今回はメモにしておっしやってください。アドバイス、質問も含めて頂いたものの枠組みの中でしたら、論理の流れなどは自由にその場で作ってくださって結構です。当日はコメントに加えて頂いた質問も出していただければと思います。ただ…。

報告者の方は、質問もアドバイス（と藤田さんが言うように）と思って、発表にその答えを盛り込んで修正して下さっても結構です。ただ、戦略として敢えて発表に盛り込まずに、質問してもらって答える形で議論を展開すると、発表原稿以上に話すことができるという方法もあります。それから、非常に厳しい質問で答えられないという場合は、打合せの時に必ず言うてください。相談して質問を取り下げてもらい、フロアーからその質問が来た場合には質問を考えてくれた人に対応してもらおうということにしてい

いですよね。

打合せの場所は会場となる藤女子大学新館552室です。1時に集合して、必要なら会場の設営（機の配置など）の後、打ち合わせます。役員会が2時からありますが、別の部屋でしてもらおうことになっていますので、2時から3時までは上西抜きでみんなでリラックス、必要なら原稿の修正などをしていてください。飲み物などは用意しないのが慣例なので、自分で用意を。

## VI. 当日——直前の打合せと本番

当日は、開始2時間前の1時に会場に集まった。発表者は人数分の原稿を用意し上西を含めた他の5人に配布。また、事前に他のメンバーから寄せられた質問についての考えを述

べたり、答えにくい質問を披露して他のメンバーからアドバイスを求めたりした。1時間経って後に上西は支部の役員会出席のために退席、その間も主にコメントーターのふたりが発表者にアドバイスをしていた模様である。

本番は30名を越える参加者を迎え、支部の規模を考えるとまずまずの数であった。最初に上西が全体のレジュメを配り、その中で手順を次のように提示して協力を要請した。

## 0. Introduction

### 1. ワorkshop担当者のセッション

- ①報告者による報告
- ②報告者同士のコメント
- ③コメントーターによるコメント
- ④報告者による応答
- ⑤報告者、コメントーターによる「応答」に対するコメント

### 2. 休憩

### 3. オープン

- ①前半のセッションで分かりにくかったことについての質疑
- ②①を踏まえた上での、全員による議論
- ③その他

### 4. 謝辞（上西）

また、レジュメには併せて次のような要請文を盛り込んだ。

#### 1. ワorkshopとは

- ①『広辞苑』「所定の課題についての事前研究の結果を持ち寄って、討議を重ねる形の研修会」
- ②『ワークショップ』（中野民夫著 岩波新書）：講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験してきょうどうで何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」

#### 2. 参加される皆さんへの御願い

本日のセッションは、報告者の発表の議論を枠組みとして終始したいと思います。参加された皆様は、自分の話したい話ではなくて、報告者の発表やコメントーターの議論を十分ご理解の上、5人の作り上げている議論をよりよくするためにはどうすれば良いかという教育的立場からのご質問・ご意見を御願いたします。

この文章は上西の意図以上に効果を発揮し、ワークショップ参加者の質問を封じ込めてしまったかもしれない。プログラム前半の、メンバー相互のコメントの述べ合いやそれに対する応答は、事前に準備をしていたこともあって充実したものとなったが、後半のオープンな質疑がメンバーの意図した方向に進んだとは必ずしも思えない。これは恐らく二重にそうであったろうと筆者は考える。ひとつには、上記のように上西が強いけん制を参加者に行ったことによって、ある種のディスカッション開始しばらくの間に行われるブレイン・ストーミング的な自由なやりとりが、目に見えない圧力によって制限されてしまったことがあげられる。今ひとつは、手前味噌かもしれないが、1月以来、テキストの問題点の共有から始まって議論作成まで緊密なやりとりの中で互いに高め合ってきた5人のメンバーの議論の質が、突然容易には入れないほどの水準に上昇すると共に、ある種のコードに基づくパラダイムのようなものを生み出していたことも感じられた。

こうした事態は、コーディネーターには課題を残すものであったが、発表者・コメントーターにとってはむしろ自らの仕事の水準の高さを証明する以外の何物でもなく、彼らにとってワークショップは成功であったと言えるだろう。終了後ある参加者に発言の無かったことを問いただすと、彼ら5人の水準が高く入り込めなかったとの答えが返ってきたが、あ

ながち世辞だけではなかったように思われる。

## VII. おわりに——総括と課題

完成議論をシンポジストが読み上げることが軸となる場としてのシンポジウムとは違って、議論の作成そのものの場としてのワークショップを目指してスタートした今回の試みであったが、3月4日の「第4回若手研究者のためのワークショップ」は、そういう意味で失敗であった。ワークショップの発表者とコメンテーターによる議論は事前に十分打ち合わせていたものであったので、彼らの間におけるテキストを巡る応答は質の高いものであったと言えるが、会場の雰囲気はそんな5人のワークショップを参加者が観賞するというようなものであった。

その原因は、コーディネーターであった上西がワークショップに対する上記のような思いを持ちつつも、いざ実施段階においては力点を違った方向に移していたことによる。それは、開催日当日の3時間から準備段階を含めた3ヶ月へ、あるいはむしろ、準備段階そのものへ無意識にシフトさせていたものである。ワークショップを完成した議論の発表の場ではなくて、議論作成の場と考えるならば、準備段階から始まっているとするのは論理的であると言える。しかしながらそれは協力の中でメンバーの議論の水準を高め相互の理解を深めたものの、結果的にそれがメンバーによる議論と当日始めてそこに入る参加者との断絶を生んでしまった。またコーディネーターが狭量のために、これまでのメンバー5人による議論の進行を防衛しようとする保守的な態度に無意識のうちに陥ってしまい、参加者を強く牽制することとなった。

百歩譲って、こうした流れが必然的なことであったとしても、当日の議論を活発なものにする手立てが全く無かったわけではない。第一回のワークショップにおいて渡辺信二氏

は、問題点の交換に支部会員全員が参加するよう呼びかけ、筆者も僅かながらコメントを送った記憶がある。今回5人のメンバーが行って来た作業に会員の有志に参加を呼びかけ、作業を公開にすれば、当日参加者全員による議論のパラダイムの共有は、少なくとも理論的には可能であったと言えるだろう。

しかし一方で、若い研究者を育てるという観点からは、準備の段階での萌芽的な議論にベテラン研究者が入ることが教育的にどのような効果をもたらすのか、必ずしも定かではない。筆者もまた議論の内容については一切の口出しをすることなくコーディネートに徹したものである。

ワークショップ終了後上西は5人のメンバーに、当日の議論を踏まえた上で議論を推敲して集め、共著によるひとつの議論にすることを提案した。こうして3月末から4月初めにかけて寄せられた議論を上西がまとめて論説として本紀要に投稿した<sup>(9)</sup>。

## 後注

- (1) 過去の「若手研究者のためのワークショップ」は以下の通り。  
 第1回：第97回研究談話会  
 日時：2003年2月22日(土)午後4時～6時  
 場所：北星学園大学第2研究棟地下1階第3会議室  
 テーマ：ペットの死を巡る日米詩を精読・比較する  
 司会：渡辺信二(立教大学文学部教授)  
 発表：井出達郎(北海道大学大学院)、松田稔(北星学園大学大学院)、桑名保留(札幌大学大学院)、藤井光(北海道大学大学院)、池田幸恵(北星学園大学大学院)、柴田雅裕(札幌大学大学院)  
 詩朗読：熊谷ユリヤ(札幌大学教授)  
 第2回：第103回研究談話会  
 日時：2004年3月6日(土)午後3時～6時  
 場所：北海学園大学豊平キャンパス、7号館1階D101室  
 テーマ：『ジュヴェネッセンス』とは— Joyce Carol Oatesの"Where Are You Going, Where Have You Been?"を読む

司会：片山 厚氏（北海道大学名誉教授）  
 発表：池田幸恵（北星学園大学）、北谷 潤  
 （北海道大学）、境田 裕（札幌大学）、佐々  
 尾知（北海道教育大学）  
 応答：加藤隆治（北海道薬科大学）、野村幸輝  
 （北海道大学大学院）

第3回：第109回研究談話会

日時：2005年3月26日（土）午後3時～6時  
 場所：北海学園大学豊平キャンパス7号館1  
 階D101室

テーマ：小説にみられる身体——Sherwood  
 Anderson, *Winesburg, Ohio* (1919) の  
 なかの「手」について

司会：岡崎 清（札幌学院大学教授）  
 発表：檜森 希（北星学園大学大学院修士課  
 程）・藤田大憲（北星学園大学大学院修  
 士課程）・佐々木有希江（北海道大学大  
 学院修士課程）

- (2) 日本アメリカ文学会におけるワークショップの取  
 り組みについては、拙稿 "Workshop Works,  
 but How?" *The Journal of the American  
 Literature Society of Japan* 4 (2005): 146-  
 48. を参照のこと。
- (3) 「2005年12月26日に、メンバーに送付したタイ  
 トルの趣旨（「概要書」と題していた）は以下  
 の通り：

ヨーロッパ言語系の文化圏におけるアメリ  
 カ文化、アメリカ文学のひとつの特徴は、初  
 めから「アメリカとは何か」という問いを問  
 いてきたことではないかと思えます。それは  
 17世紀以来、わざわざ遠い地に来て国を  
 造るということをする中で、なぜこのような  
 ことをこんなところなのかという自己正  
 当化が必要だったのではないかというのが、  
 すぐ思わされるところです。

そうした動きに加速がかかるのが、19世紀  
 から20世紀初頭にかけてであることは理解で  
 きます。西部の併合（による西海岸のスペ  
 イン語文化圏の人々の参入）および大量の移  
 民、それもそれまでアメリカ合衆国を築いて  
 きた人々の言語文化圏とは異なった移民、  
 が1840年代（のアイランド移民）以来流  
 入し、「アメリカの文化とは何か」というこ  
 とが極めて流動的になったからだと思われま  
 す。

1920年代になって、極めて公的なレベルで  
 は移民を規制する法律が次々とできる一方、  
 南部の自警団であったKKKがカソリック  
 （南欧・東欧移民）、ユダヤ、アフリカ系を

排斥する組織として再出発し組織が急拡大  
 するなど、「アメリカ」についての社会的自  
 意識の高まりがピークに達しているように思  
 われます。

その後、不況下での国際共産主義思想の  
 浸透や、ナチズムの台頭に対する民主主義  
 防衛といったような、ユニバーサルな思いが  
 広がって国家的自意識は薄められますが、  
 1920年代に築かれた国家意識はある程度定  
 着したと言えるのではないのでしょうか。近年  
 のアメリカにおける宗教的右翼の台頭が根強  
 いのは、このようにして形成された国民意識  
 が人々の心のひだに沈み込んでいることによ  
 るように思えます。

さて、そのような国家意識が高まりを見せ  
 るという文脈の中で見た時、ヘミングウェイ、  
 フォークナー、フィッツジェラルドといった  
 1920年代に登場した新しい作家達はどのよう  
 な文学を作り出したのか。それがこのワーク  
 ショップで考えてみたいと思うことです。

- (4) Michaels, Walter Benn. *Our America:  
 Nativism, Modernism, and Pluralism (Post-  
 Contemporary Interventions)*. Durham, NC:  
 Duke UP, 1996. および中村亨著『『ボクサー』  
 における『彼ら』と『我々』——不信と連帯  
 のはざま』『ヘミングウェイを横断する』日本  
 ヘミングウェイ協会編、東京：本の友社、  
 1999. pp.328-42. を参照。
- (5) 送られてきた問題点のうち、紙幅の関係で最終  
 的に採用されることになる作品に関するもの  
 に限って、以下に掲載した。カッコ内は送って  
 きた者の名前：

【"Red Leaves"】

- ①直接言及されないことから逆に浮かび上がる  
 「白人」または「白人性」とは何か。（藤井）
- ②「労働」という概念に関しての価値観の違  
 い。（藤井）
- ③死をめぐる描き出される奴隷の「生」とは  
 何か。あるいはインディアンと奴隷という異  
 なるシステムの死生観は。（藤井）
- ④時間および世代の感覚（→南部白人との対  
 比？）（藤井）
- ⑤二つの人種間の乗り越えられない溝？その一  
 方で「白人化」ということは民族的なアイ  
 デンティティが揺らいでいるということだ  
 ろうか。（藤井）
- ⑦大掛かりな移動（Issetibehhaの二度の旅行、  
 奴隷のアメリカへの強制移動、逃亡した彼の  
 追跡…）の持つ意味とは。（藤井）

- ①赤いかかとのついた靴は、物語全体においてどう機能しているか。(本荘)
- ②なぜ「インディアン」が「黒人」奴隷を所有しているのか。(本荘)
- ③「インディアン」の墮落した描かれ方が意味するものとは。(本荘)
- ④「黒人」が物語全体において果たす役割とは。(本荘)
- ⑤作品中における「黒さ・暗さ」や「闇」は、どのような効果を生むか。(本荘)
- ①この物語に白人が出てこないことには何か意味があるのだろうか。(藤田)
- ②インディアンが黒人を「食う」という発言が多々あるが、実際に行われていたのだろうか。また、「食う」ということには他に何か意味はないだろうか。(藤田)
- ③インディアンの酋長に継承される「靴」には、何か意味があるのだろうか。(藤田)
- ④奴隷船でのエピソードに出てくる鼠は、何を意味しているのだろうか。(藤田)
- ⑤黒人奴隷の逃亡の範囲が狭い気がするのですが、それはなぜか。(藤田)
- ①間接的に言及されている白人の存在はどのような解釈できるか。(井出)
- ②モケタッペが首長として凋落してしまった原因は何か。(井出)
- ③逃亡した黒人が「彼自身と彼自身の二つの声 (the two voices, himself and himself)」を聞くと、片方の声にチカソーの言葉である「Yao」が含まれているのはなぜか。(井出)
- ④奴隷貿易に対して皮肉的な描写がなされているが、それを奴隷制度に対する反対の意識として読むことは可能か。(井出)
- ⑤逃亡した黒人奴隷について himself という語が何度か使われるが、それはチカソー族又は黒人という集団のアイデンティティに対してどのような意味を持つのか。(井出)
- ①インディアンたちの白人非難から見えてくるもの (中野)
- ②奴隷制度がインディアンにもたらしたもの (中野)
- ③インディアンは黒人をどう見ていたか (マイノリティ間での比較) (中野)
- ④三人の首長に見るインディアンの変容 (中野)
- ⑤モケタッペの墮落と白人社会はどう絡んでいるか (中野)
- 【"The Diamond As Big As the Ritz"】
- ①他の作品にも見られるような南/北の図式に「西」が付け加わることの意義とは。なぜモンタナなのか。(藤井)
- ②ゴールド・ラッシュと重ね合わせてみることはできるか。(藤井)
- ③一種の「天国」が奴隷やさまざまな暴力で支えられていること。(藤井)
- ④この土地がアメリカの歴史の「外部」にあることについて、時間の思考はどのようなものか。(藤井)
- ⑤「見つかること」への恐れ/映画のセットのような建物の荘厳さ、という二重性、「見ること」の強調。(藤井)
- ⑥戦争と奴隷制といったアメリカの歴史はどのように描かれているのか。(藤井)
- ⑦飛行機、映画などのテクノロジーの描かれ方はどのようなものか。(藤井)
- ①なぜダイヤモンドの山と城はモンタナにあるのか。(本荘)
- ②周囲から隔離した世界である必要性は何か。(本荘)
- ③飛行機が物語中で果たす役割とは。(本荘)
- ④「黒人」が物語全体において果たす役割とは。(本荘)
- ⑤ジョンの言葉「ダイヤモンド」と「幻滅」が秘める意味とは。(本荘)
- ①Johnの訪れたPercyの家が、(ボタンを押すとお風呂に入れるなど)機械化されているのはなぜか。富と機械化・自動化が強く結びついていることに何か意味はあるのだろうか。(藤田)
- ②Mr. Braddockの人種観はどのようなものなのだろうか。彼の言うidealismとは、どのようなものなのか。(藤田)
- ③Percyの母親に、スペイン人の血が入っているのには何か意味はあるのだろうか。(藤田)
- ④そもそもWashington家の人々は、なぜ自宅に客を招くのだろうか。隠すべき秘密があるのに、「さみしい」といった理由だけでは…。(藤田)
- ⑤この物語において、富と青春はどのような関係にあるのだろうか。(藤田)
- ①「ワシントン」という名前はどのように解釈できるか。(井出)
- ②「フィッシュ (Fish)」という村の名前はどのように解釈できるか。(井出)
- ③白人との差異が強調される黒人の描写は、どのような文脈に結びつけることができるか。(井出)
- ④主人公の、金に対する憧れから幻滅という変

化（成長）は、どのような文脈に結びつけることができるか。（井出）

- ⑤アメリカの話であるのにかかわらず、「世界で一番の～（the most/est…in the world）」という表現が多用されるのはなぜか。（井出）
- ①アメリカの内と外のギャップを寓話化したのではないか（外側は美しい倫理観をまもってはいるが…）（中野）
- ②道徳の崩壊を非難しているのではないか（大量消費社会における神／道徳の存在について）（中野）
- ③人が富を有するのか、富が人を支配するのか（中野）
- ④1920sに誕生したとされる若者文化の夢のような儚さについて＝当時のアメリカ（中野）
- ⑤体一つでイギリスから渡ってきたアメリカ人は、富を得ることで何を背負うことになったか（中野）

【"Wine of Wyoming"】

- ①フランス語の使用はどのような効果を生むのか。（藤井）
- ②イタリア人、ポーランド人への言及は作品内でどのように機能しているか。また当時の文脈ではどのような意味を持ちうるか。（藤井）
- ③宗教に関する話題から「カソリック」という仲間意識が浮かびあがるとすれば、「アメリカ」という共同体は？（藤井）
- ④間接的に示される「インディアン」「スペイン」といった語り手の過去を考慮に入れるとき、彼の「アメリカ」に対する意識とはどのようなものか。（藤井）
- ⑤Fontan家のそれぞれのキャラクターの描かれ方のもつ役割（たとえば息子は"Fathers and Sons"のNickの過去の姿と比較できるか）。（藤井）
- ①なぜフランス系移民が登場する必要があったのか。（本荘）
- ②「インディアン」の存在は物語にどのような効果をもたらしているか。（本荘）
- ③物語の結末部で、なぜ「私」はワインを飲むことができないのか。（本荘）
- ④カトリック教徒であることは、どのような効果を生んでいるか。（本荘）
- ⑤なぜアメリカ人の醜態が描かれているのか。（本荘）
- ①Fontan夫妻の息子が、インディアンと結婚しているのはなぜか。（藤田）
- ②物語の会話の中で、フランス語のみの部分と、フランス語と英語が混ざる部分があるが、特

定の語に英語を用いているのには何か意味があるのだろうか。（藤田）

- ③Schmidtとは誰なのか。また、彼がカトリックだとなぜおかしいのか。「教会が多すぎる」という発言もあるが、彼らの宗教観はどのようなものなのだろうか。（藤田）
  - ④もとの国籍と、現在アメリカに住んでいることについてですが、Madame Fontanの言う、「ビールにウィスキーを混ぜる」アメリカ人とは、何人なのか。そもそもMadame Fontanは何人という意識を持っているのだろうか。（藤田）
  - ⑤物語の最後で、結局手に入らなかったワインは、何を意味しているのだろうか。（藤田）
  - ①アメリカ人が「野蛮」であるという見解について、中村の論文で紹介されているようなダーウィニズムの影響の読みとすることはできるか。（井出）
  - ②大統領についての話題はどのような意味をもつか。（井出）
  - ③アメリカを非難するフランス人に対して、主人公はどのようなスタンスをとっているか。（井出）
  - ④アメリカ人とフランス人に加えて、間接的に言及されている他の外国人（イタリア人、ポーランド人など）の存在はどのような解釈が可能か。（井出）
  - ⑤アンドレのアメリカに対する関係は、フォンタン夫妻のアメリカに対する関係と比べると、どのように解釈できるか。（井出）
  - ①マダム・フォンタンから見たアメリカ（アメリカ人には当然のこととして映っているものが、外から来た人はどう映るのか）（中野）
  - ②主人公やフォンタン夫妻のナショナル・アイデンティティー（彼らは何人で、それを決めるのは何か。言語、国籍、宗派、住んでいる場所、または他にもあるのか）（中野）
  - ③禁酒法など、国家としてアメリカが掲げる倫理と、登場人物たちの倫理観とのズレ（中野）
  - ④インディアンへの扱われ方（主人公とフォンタン夫妻とではどう見方が異なるか）（中野）
  - ⑤大衆消費社会における宗教（道徳が崩壊したと言われている時代にアメリカに住んでいた人たちにとって、宗教／宗派は何をもたらしていたのか）（中野）
- (6) 各メンバーが寄せてきた作品を選定する理由は以下のとおり：

【Hemingway】

"Wine of Wyoming"

(中野) この作品は、ヨーロッパから見た当時のアメリカにおけるあらゆる枠(人種、宗教、言語、文化、そして国家など)の在り方、特に、これらの枠が移民にとってどのような役割を果たしていたのかを探ることを可能にします。

まず、登場人物たちの会話は、アメリカのある側面をフランス的価値観で異化して伝えます。例えば食べ物、禁酒法、アメリカ人のお酒の飲み方や宗教への価値観などがそうです。また、これによって、国家の掲げる倫理観と、実際の国民のふるまいとの間のずれも明らかになってきます。

次に文化的多元論の問題があります。フォンタン夫妻の様々な共同体への自意識を観察することで、アメリカにおける移民のアイデンティティーを探ることができます。例えば、マダム・フォンタンは自分がカトリックであるという問題を口にしますが、それをあえてプロテスタントに変えようとはしません。また、言語も含めて、アメリカに移住して来たものの、彼女は積極的にアメリカのシステムに適応しようとはしていないようにも映ります。

善良な人たちとして描かれているフォンタン夫妻は、あらゆる面で排他的姿勢を保つアメリカで、自分たちをアメリカ人として肯定できないように思われます。当時の文脈で、移民が自分のことをアメリカ人であると断言するには、このような様々な枠の問題があったのではないのでしょうか。

(藤田) "Wine of Wyoming" については、「アメリカとは何か」を考える上で、フランス出身の Fontan 家の人々のキャラクターの描かれ方や、彼らから見たアメリカ、宗教(プロテスタントやカトリック)や移民(フランス人、イタリア人、ポーランド人)の存在など、議論に用いることができそうな問題点が多々あると考えました。アメリカに住みながらもフランス語を使い、ワインを作る Fontan 夫妻は、いったい何人なのでしょう。主人公やフォンタン夫妻のナショナル・アイデンティティー(彼らは何人で、それを決めるのは何か。言語、国籍、宗派、住んでいる場所、または他にもあるのか)、国家としてアメリカが掲げる倫理と、登場人物たちの倫理観とのズレ、最後に手に入らないワインの意味を考えてみることなど、「アメリカとは何か」を考える議論の作成に有効ではないかと考えました。

(本荘) 禁酒法を一つのテーマとし、禁酒法そのものが招いた腐敗、無秩序、法律無視の風

潮を暴露する描かれ方(ヘミングウェイとポーリーンが1928年にワイオミング州シェリダン近隣に滞在し、そこで出会ったフランス系移民の生活を題材にした物語だが、この作品が収録された短編集『勝者には何もやるな』は、禁酒法が廃止された1933年に出版されたことも議論の展開に役立つかもしれない)が、禁酒法への批判的立場の表明なのかあるいは禁酒法を遵守する側に立つのかというどちらの立場も取りえないプロットの曖昧さに基づく分析。また禁酒法との関わり合いの中で、「私」自身のアメリカ像とフォンタン夫妻が包くアメリカ像(カトリック教徒が見た、あるいは批判するアメリカの姿)の比較や新移民の描かれ方(彼らを内部の少数派とするのか、外部の他者として見るのか)を通して1920年代における国民感情や集団的価値観を検討することが可能であり、時代背景として作品に伏在するネィティヴィズムや大統領就任演説との関わりを視野に入れてアメリカとは何かという議論も可能だと思われる。

#### "Fathers and Sons"

(井出) 中村の論文で提起されている「我々」/「彼ら」の問題について、白人/ネィティヴという関係に、父/息子という関係を絡ませることによって、その議論をさらに発展させることができるのではないか。主人公は、父の性についての知識が当てにならないと思っているが、それはオブジェイ族の性の知識を身につけていることで始めて可能となる認識である。そこには、息子の意識が、「インディアン」を見るときは「父」の立場に立ち、「父」を見るときは「インディアン」の視点に立つという構造、すなわち、「息子」にとって、「父」は、「我々」でありながら「彼ら」であるという二重性をみることができる。この構造については、アイデンティティが強化(移民規制の強化など)される一方で「他者」に魅了される意識(国籍離脱者の出現など)が高まる、あるいは、禁酒法が施行される一方で密造・密売が氾濫するといった、1920年代におけるアメリカの二重の意識に結びつけることで、議論をより広げることができると思う。

(藤井) "Red Leaves" では間接的に暗示されるにすぎなかった「白人」という姿がここでは Nick を通じて提示される点が重要であるように思われる。すなわち「父」の領域と「インディアン」という二つのシステムが主人公を通じて接触している。後になって「フランス」という「外」も重要な要素として登場することになる



が、それら共同体との関係における主人公の位置はここでも多義的であるように思われる。

また、世代の間での変容がここでも登場しているが、「世代によるアメリカの父親像の変化」(中野)という直線的な時間の流れだけではなく、「自分の少年時代の回想」(藤田)という、時間を遡って再構成する試みが見られることも注目すべき点ではないか。どのような「過去」を提示するのか、それが「現在」のNickの自己をどのように規定するのか、息子という「未来」はそのときどのような意味を帯びることになるのか、というテキスト内での時間構成のみならず、「タイトルが複数形であること」(藤田)を最大限に拡大するなら、Nickの単独の行為は「アメリカの歴史」へ、すなわち「アメリカの父たちと息子たち」という問題に接続して考えることも可能だろう。(藤井)

【Fitzgerald】

"The Swimmers"

(中野) この作品は、国家として肥大化したアメリカのシステムに批判的ですが、その変わり続ける未来への可能性を肯定しています。

まだ歴史が浅く、金と法の下で大きくなったアメリカは、それを作ったはずのアメリカ国民をも飲み込んでいきます。登場人物たちは、自分たちの作ってきたシステム(「金=力」)に踊らされているようにも見えます。

一方で、ウィーズやシュベットのよう、アメリカの倫理とシステムを自分の中に取り込むことができれば、大きな力を持つことができます。アメリカという制度の中でどれだけ自由に泳げるかが、成功できるかどうかの秘訣になっているのです。そこには外来の倫理観は通用しません。「金=力」という書類の上での図式が、人々を吸収してどんどん大きくなっていったのです。そこには、ワズプであっても外国からの移民であっても、社会の仕組みに適応し、「私はアメリカ人です」と言い切った者勝ちのような側面さもあります。

このように、様々な文化を吸収して変わり続けるアメリカは、何とも形容し難い生き物のようにも映りますが、だからこそ未来への希望を見出すことができるのです。

(井出) あからさまな「アメリカ」称揚の裏に、国境を越えた国家意識という問題を読み取ることで、幅のある議論ができると思う。主人公がフランス行きの船の中でアメリカ精神を称えるとき、彼の意識は、大西洋をフロンティアに、フランスをその向こう側にあるアメリカと見な

しながら、世界という場においてフロンティア精神を反復しているのではないか。そこでは、「アメリカ」という国家意識が、一つの国家という枠を越え、「アメリカ」=「世界」という意識へと変容しているのではないだろうか。このような視点は、それまで孤立主義をつづけ、国際関係へ巻き込まれざるを得なくなった1920年代という文脈へ結びつけることができる。作中で書かれる「泳ぐ」という行為についても、海を超えていった国家意識という視点から、有益な議論ができると思う。もしかしたらそれは、アメリカにおける帝国主義といった文脈にも発展させることも可能かもしれない。

"The Diamond As Big As the Ritz"

(藤田) 「アメリカとは何か」という問題を考えるときに、大きな問題点で言えば、ワシントン家(構成する家族だけではなく、建物や存在そのものを含めて)とは何なのか、ということ、問題点として議論を作れるのではないかと思います。

ワシントン家が、アメリカの内部にありながらもアメリカから隔離されているという二重性の意味や、「国家」という枠組みの原型である「家族」が住むこの楽園が、奴隷制による富の占有と、飛行機を高射砲で打ち、侵入者を排除するという暴力で成立していること、一家の崩壊と青春の終わり、ダイヤモンドの意味するものなど、議論に用いることができそうな問題点が多々あると考えます。この小説では、アメリカ国外のことが出てきませんが、「ワシントン家」と「アメリカ、もしくは飛行機でワシントン家を探索する人々」の関係を「アメリカ」と「外国」と置き換えてみるができるかもしれませんし、富と人間(主に白人)との関係をフィッツジェラルドはどのように考えていたのかという問題も議論に用いることができるのではないかと考えます。

(藤井) 「アメリカの内と外のギャップ」(中野)という側面を空間的な問題として考えるなら、モンタナという合衆国の領土内にありながら、その地図(領土)「外」に位置しているという共同体の位置取りは単純な区分を許さないであろうし、「周囲から隔離した世界」(本荘)である同時に、飛行機の登場に絶えず脅かされていることから、上空からの視点という空間的な広がりを考えることができる(ちなみに神もまた上空からの視点だとすると、飛行機は非常に重要な要素ではないだろうか)。

さらに、そこでの人種間の関係が歴史の書き

換えによって維持されていること、神を買収することで時間を逆に戻そうとする試みによって、「富と青春」(藤田)が時間の問題において結びついていることなども、モンタナにおけるシステムと時間の関係を考える際に手がかりになるだろう。時代との関わりの点で、富や機械化(藤田)という「1920年代当時のアメリカ」(中野)の要素との共通点が描かれていることも、このシステムの姿を最終的により大きな文脈へと接続する際に深みを持たせてくれるように思われる。

(本荘)ウォール街が国際的な経済の中心地となり、未曾有の経済的繁栄を誇っていた時期に、国に対する人々の意識はどのようなものか、また富や繁栄とはどのような意味を持つかについて検討できること。また内部対外部という図式を基軸として、共同体に対する意識と共同体の外部世界に対する意識、共同体内部の秩序とそれを突き崩そうとする外部からの侵入者(自宅に招待される外部からの客、監禁される人々、飛行機による襲撃の描かれ方)という視点からアメリカ人の集団的アイデンティティを検証できる点。さらには、このような視点を援用しながら、「黒人」の描かれ方と白人の「黒人」に対する人種意識など人種的な側面の分析が可能であること。それに加えて共同体内部の「黒人」たちが、フォレスト将軍が壊滅した南軍を再編成して正々堂々とした戦いで北軍を打ち負かしたと自作の布告を読んで聞かされたように、アメリカの歴史的事実が白人の都合のいいように歪曲されていることも議論に最適な題材を与えてくれていると思われる。

#### 【Faulkner】

"Red Leaves"

(中野)この作品は内部からアメリカにおける民族間の問題を提示します。

まず、間接的に言及されている白人についてです。インディアンたちは、奴隷制というシステムを持ち込んだとして、白人に対し批判的な態度をとっています。また、奴隷制の導入とインディアンの首長の墮落を関連づけて考えることもできます。

次に少数民族間での問題があります。この作品の中では、インディアンが黒人を奴隷として使う、つまり、少数派が少数派を支配する体制が確立されています。黒人は白人社会でインディアンの支配を受けるという、二重の権力のもとにあり、それによって殉死という自分の民族には全く関係のない生死を迫られることにも

なります。

このように、白人の持ち込んだ奴隷制や、異なる時間や労働の概念により、インディアンたちは必要のなかった何かを背負わされているようにも思われます。この作品は、そういった白人の介入による原住民たちへの負の影響を描いているのではないのでしょうか。

(井出)「共同体」のアイデンティティに対する「個人」の意識という問題を提出している点で、「国家」の意識というテーマに裏側から光を当てることができると思う。主人公は、「インディアン」という共同体のみならず、「黒人」という共同体からも逸脱していく。このような共同体それ自体から逸脱していく全くの「個人」は、ヘミングウェイやフィッツジェラルドの作品では提出されていない問題だと思う("Swimmers," "Fathers and Sons"などの複数形を用いた題名は、そのことを裏付けているように思われる)。「国家(共同体)」の要求するアイデンティティを受け入れれば「個人」は死んでしまうが、ならば「国家(共同体)」に徹底的に背いて「個人」は生きられるのかというディレンマは、古典的な問題とも言えるが、それを社会的自意識の高まる1920年代という文脈で考える際に、有益となるテキストではないだろうか。

(藤田)直接言及されないことから逆に浮かび上がる「白人」または「白人性」、インディアンという異なった共同体から見た白人観などを考えることは、「アメリカとは何か」を考える上で有効であると考えました。白人作家であるFaulknerがインディアンの視点から白人を見る、ということはどういう意味を持つのか、また「赤い靴」や、インディアンの酋長の継承問題(共同体のアイデンティティ)への白人の影響、インディアンと黒人奴隷の価値観の違い(共同体同士の価値観の違い、ひとつの場所に異なった価値観を持つ共同体同士が生きること)など、問題点が多々あると思いました。

(藤井)Fitzgeraldで提示された「内/外」のねじれた関係を念頭に、ここでの「マイノリティ間での比較」(中野)を考えると、「インディアン」と黒人奴隷という二つのシステムは、「アメリカ」の「内部」でどのような場を占めることになるのかという空間的な問題が浮かび上がってくるだろう。

さらに、「三人の首長に見るインディアンの変容」(中野)という視点を考慮するならば、先住民の生活が世代を経る中で変容している様

子のみならず、「逃亡した黒人の自己との対話にチカソーの言葉が含まれている」（井出）という指摘からは、先住民共同体において長期間生きてきた黒人奴隷の位置取りの微妙さが垣間見えるのではない。

このような彼の位置を考えると、「逃亡の範囲」（藤田）という問題を単に物理的な境界以外の要素を加えて考えることが可能であろうし、最後に犠牲になる奴隷の「生」とはどこに位置するのか（それは先住民に支配されているのか、それとも最後の瞬間までは彼に属するのか、それとも両者がせめぎあう場なのか？そこに「白人的」なものも関わってくるのか？）という問いを「アメリカ」という大きな枠の中で捉え直すことも可能になってくるだろう。

（本荘）アメリカ先住民を巡っての連邦政府の政策が非難される一方で、社会ダーウィニズムを基調とした、強者である白人の前に弱者であるアメリカ先住民は滅び行く運命にあるという意識が幅広くアメリカ国民に浸透していた時期を背景に、伝統的な生活習慣を失う悲惨な先住民、赤いかかとのついた靴、先住民が所有する「黒人」奴隷の描かれ方から浮き彫りにされる白人像、ひいては作者自身の人種意識を検証できる点。またそのような作業から当時の白人（さらに限定すれば WASP？）の民族的少数派に対する意識と民族的少数派による白人に対する意識を分析できる点。さらには先住民と「黒人」それぞれの、あるいはお互いの関係性の中から集団的なアイデンティティに対する意識を検証できる点。その一方で、先住民および追跡される「黒人」それぞれの「移動」が持つ意味から当時のアメリカ人の国家に対する意識を検証できる可能性があると思われる。

- (7) 既に送られたメンバーの意見書を読んで発表者3人が送って来た意見書は以下の通り：

（中野）再び私の意見を送らせていただきたいと思います。作品を選ぶのにとっても苦労した私ですが、今回みなさんの意見を読ませていただいて、もう一度ゼロから考えさせていただきました。どの作品も捨てがたかったのですが、やはり前回と同じ結果になりました。みなさんの議論を読ませていただいて、再び自分なりにまとめてみたものが下の2つです。

私が Hemingway の作品で選んだのは "Wine of Wyoming" です。この作品は、禁酒法やネイティヴィズムなどの時代背景を考慮に入れて、人種、宗教、文化、国家など、当時のアメリカにおけるあらゆる共同体への価値

観を取り出して、広く議論することが可能だと思いました。また、本荘先生のおっしゃる、移民を内部の少数派と見るか外部の他者と見るかという価値観の他に、移民自身はどのような価値観を持っていたのかを議論することで、「ルツボ／サラダ・ボウル」まで話を繋げられると思いました。これらの複雑に絡み合った共同体への意識から、「アメリカとは」という一貫した何かが見えてくることも期待できると思いました。

私が Fitzgerald の作品で選んだのは "The Swimmers" です。この作品は、アメリカという国家の増大し続ける計り知れないほどの力を、いい意味でも悪い意味でも提示しているように思えました。この金と法を土台に、個人を無視して多くの人種を束ねていくアメリカという国家では、スタインベックの『怒りのぶどう』における、「祖父がヘビを殺し、父がインディアンを追いつめた」中西部の小作人の、「今度は誰を相手に戦えばいいんだ」という言葉にも象徴されているように、特定の誰かではなく、国民でもなく、見えないシステムそれ自体が実権を握っているように思えました。このようなシステムの下では、都合のいいように物事が進んでいるうちはいいのですが、大恐慌などで一度そのバランスが崩れてしまうと、もはや国民の手には負えないくらいの絶対的な悪夢に変化してしまいます。また、アメリカの内部だけでなく、井出さんのおっしゃる国境を越えた国家意識という問題に関しては、当時の文脈を考慮して、それ以上に広い議論ができるのではないかと感じました。「泳ぐ」に関しても、誰がどこを泳いでいるのかという点で、興味深い議論が可能だと思いました。

（藤田） 作品：Wine of Wyoming (Hemingway) および The Diamond As Big As the Ritz (Fitzgerald)

2つの作品の提示についてですが、個人的な意見としては2作品とも共通している部分がありますので、まずはそれを書きます。

Wine of Wyoming および The Diamond As Big As the Ritz, どちらの作品もアメリカという国家の内部にある外部のもの、異質なものを取り扱っていることに興味を持ちました。たとえば Wine of Wyoming であれば、新移民の描かれ方（彼らを内部の少数派とするのか、外部の他者として見るのか）（本荘）は今回のテーマを考えた場合、重要な示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。また、The Diamond As

Big As the Ritzであれば、ワシントン家はモンタナという合衆国の領土内にありながら、その地図(領土)「外」に位置している(藤井)こと、合衆国の歴史とは異なった歴史の中に存在していることなど、内部にある外部(異質なもの)と考えることができるのではないのでしょうか。アメリカについて考えるとき、外部との単純な比較ではなく(という考え方も大雑把ではありますが)、内部にある異質なものをしっかりと見つめることは重要ではないかと考えます。

また、作品ごとに意見を述べれば、Wine of Wyomingについては禁酒法を一つのテーマとし、禁酒法そのものが招いた腐敗、無秩序、法律無視の風潮を暴露する描かれ方(本荘)は、1920年代のアメリカを考えるときに避けて通れないテーマではないのでしょうか。また、フォントラン夫妻の様々な共同体への自意識を観察することで、アメリカにおける移民のアイデンティティーを探ること(中野)はアメリカという国のアイデンティティーを探ることへと通ずるのではないかと考えます。

The Diamond As Big As the Ritzについては、ウォール街が国際的な経済の中心地となり、未曾有の経済的繁栄を誇っていた時期に、国に対する人々の意識はどのようなものか、また富や繁栄とはどのような意味を持つかについて検討できること(本荘)も非常に重要だと考えます。その他人種、歴史、経済など、議論の問題点となるものが多々あると考えます。

(井出)ヘミングウェイについて:そのまま" Fathers and Sons"を推薦したいと思います。中野さんと藤田さんがともに議論の中心にしている「集団が掲げるアイデンティティと登場人物たちのそれとのズレ」の問題は、そのまま「父と子」の構図として扱うことが可能であると思われるからです。加えてこの作品は、「白人/インディアン」という人種間の問題を絡ませています。それは、「アメリカ(人)とは何か」という問題に対して、通時的な差異の地平と共時的な差異を地平を同時に扱うことであり、より発展的な議論の可能性が期待できると思います。

フィッツジェラルドについて:推薦作品を変更して"The Diamond As Big As the Ritz"にしたいと思います。自分が主張していた「国境を越えた国家意識」という問題は、"The Diamond"における「外」と「内」の問題として考えることが可能です。そして、"The Swimmers"では単にその境界が変容したとい

う「結果」のみを提示しているように思われるのに対し、こちらの作品は、その「原因」についてもまた、「富や機械化(藤田)という「1920年代当時のアメリカ(中野)の要素」との絡みあいでも議論できると思われま

- (8) 原稿案は紙幅の関係で省略し、アドバイス、質問、コメントの3種類あったが、これも紙幅の関係で、質問のみを以下に掲載する。

#### 【井出宛】

(中野) ①井出さんのおっしゃる「アメリカ的なもの」が20世紀初頭の「アメリカらしさ」である場合、そこに至る以前の奴隷制などの諸制度はどう見なされるのでしょうか。作品では奴隷制が一つの軸になっていますし。

②黒人奴隷の体現する「彼自身」の意思とは、排他的なものなのでしょうか。それとも、「チカソー族に隷属している黒人」というアイデンティティとの共存が可能なものなのでしょうか。

③黒人奴隷の体現する「彼自身」の意識とは、逃亡を終えて共同体に戻るまでの一時的なものなのでしょうか。または、「それもわしが死にたくないからだよ」などと発話して自身を意識する際の瞬間的なものなのでしょうか。もしくは、一旦その意識を体現した彼にとっては、殉死の意味すら変わってくるような永続的なものなのでしょうか。

(藤田) ①井出さんの議論の冒頭で、「黒人は食べるもの→奴隷であり、商品である」というインディアンの価値の白人化について述べられていますが、作中にあった「労働」の概念についてのインディアンと黒人の価値観の違いについてはどのように考えられますか。直接議論には関係しないかもしれませんが…。

②井出さんの議論の中で、この小説における黒人奴隷の逃亡というプロットの中で、彼が「自分自身」の声を獲得していくという過程が見ることがいう表現がありますが、その上で彼が最終的にインディアンに捕らえられる(=殺される)ことは何を意味すると考えられますか。

(藤井) ①最終的に犠牲というチカソーの慣習(これは「アメリカ的」とはいえない)に奴隷が捕らえられることはこの論旨においてどのような意味を持つのか。

②「アメリカ的」なものへの同化という意識の歴史的変容については論じられているが、一方の「個人」という意識にもそのような変遷が見られるのだろうか。

- ③「アメリカ的なもの」に囲い込まれているということは「もはやアメリカ化している」とは同一ではないことを考えると、チカソーと黒人共同体の「アメリカ化」は正確にはどの程度進行していると思われるか。

(本荘) ①作品中では「インディアン」という言葉だけで、彼らがチカソー族であることは明示されていないように思えますが、「黒人は食べるものである」という価値観から「黒人は奴隷であり、商品である」という価値観への変遷は、チカソー族の風習として読み取れるのでしょうか。あるいはフォークナー自身が実際に知っていたインディアンとして描いているのでしょうか。チカソー族の風習として明らかなことであれば、実際にアメリカ南部で奴隷制を敷いていたインディアンの習慣（白人との物々交換を通して生存の道を探る以外に手がなかったゆえに、鹿皮などを補完する白人商人との公益商品として着目するようになったのが黒人奴隷であったこと。そして捕獲した植民地からの逃亡奴隷を白人側に引き渡すことで報酬を得るという状況に陥り、やがては「白人の価値観によって一方的に包囲され、強迫されていること」）を組み込むことでさらに説得力が増すのではないのでしょうか。

**【中野宛】**

- (井出) ①題名の「あいまいなアメリカの私」は、『あいまいなアメリカ』の私」なのでしょうか、それとも「あいまいな『アメリカの私』」なのでしょうか。
- ②題名の「あいまいなアメリカの私」の「私」とは、具体的に誰（何）のことを言っているのでしょうか。
- ③アンドレについて、「貧しい移民の労働者の家庭に生まれた彼は、親のようになるまいとし」と説明しているのですが、それはどのような点から読みとることができるのでしょうか。
- ④映画や本という媒介によってアメリカ化されるということもまた、「アメリカ化教育」の中に含まれるのでしょうか。
- (藤田) ①禁酒法を軸にして、「アメリカ」と「孤立主義的な態度をとらざるを得ないフォンタン夫妻」という議論を行ううえでは直接関係しないかもしれませんが、フォンタン夫妻が反発するものはアメリカだけではなく、たとえば同じカトリックでも、ポーランド人のことを毛嫌にするような描写も作中には見られます。彼らの「孤立主義的な態度」は、

アメリカという共同体へのものだけなのでしょうか。

- ②「2. フランス人かアメリカ人か：アンドレ」において、「アンドレは移民家族からアメリカ人家族への、国と世代の橋になりうる存在である」という議論をされていますが、フォンタン夫妻にはもう一人息子がいて、インディアンと結婚していますよね。この「インディアンと結婚した息子」はどのような立場にいると考えますか。彼もまた、移民家族からアメリカ人への、国と世代の橋になりうる存在でしょうか。

- ③禁酒法に対する著者自身のアメリカ批判について述べられていますが、アメリカという共同体から孤立するフォンタン夫妻が親切にしてくれる、語り手の立場はどのようなものなのでしょうか。「アメリカ的な道徳を守る名目で作られた、高貴な実験とさえ呼ばれた禁酒法」のアメリカと、そこに住む「孤立を余儀なくされるフォンタン夫妻」。この両者の間に存在するアメリカ人である語り手はどのような立場の存在なののでしょうか。

(藤井) ①語り手の位置取りをどう見るべきか（作中での描写に限定して）。猟や本など、語り手とアンドレに共通する要素が存在することを考えると、語り手の「アメリカ」との関係はどのようなものと考えられるだろうか。

- ②「フランス的」であろうとする両親とアンドレの間には何らかの葛藤が見られるか。（見られないとすればそれをどう考えるべきなのか）。

- ③作品のしめくりに置かれたワインをめぐるエピソードはこの論旨に沿って考えることができるだろうか。

(本荘) ①2 ページ目の第2段落下から3行目「フォンタンは酔っ払ったアメリカ人を「豚野郎」(175)と呼びますが」は、おっしゃるとおり「彼ら/我々」という集団意識の表れですが、それより後の段落での、禁酒法にも端を発しているフォンタン夫妻自身の「外」の意識の例証としてあげるのはいかがでしょうか。もし中野さんのお考えが私とは違うものでしたら困るので、質問の項目に入れました。

- ②4 ページ目の第2段落最初の行「これらの見解はアンドレに適應することができます」は、アンドレの考え方（アメリカ社会に適應することができますればアメリカ人である）と通底する、あるいはつながるという意味でいいです

か?多分そうだと思うのですが、確認です。

【藤田宛】

(中野) ・ワシントン家をアメリカの最たるものとした場合、最後のワシントン家の崩壊をアメリカという国家に拡大したら、どのような事態が想定されますか。

- ・著者のアメリカ観についてですが、結論にあるように、ワシントン家をアメリカという国家の最たるものとして、アメリカの繁栄に対するアメリカ人自身の潜在的な恐怖を描いた著者は、そのような当時のアメリカ社会に対してどのようなスタンスを取っていたと考えることができますか。否定的だったのか、それとも自らも含めて仕方のない状況だと思っていたのかなど。

(井出) ①飛行機を「機械・テクノロジーの象徴」かつ「神の視点」と解釈するとき、藤田さんの議論に例えば、経済的・物質的繁栄の産物である前者は、後者によって処罰される対象となります。その場合、前者と後者は互いに相反するものになってしまうのですが、その矛盾を抱えた二者の関係は、どのように説明できるでしょうか。

- ②「最もアメリカ的な存在」が、あえて歴史的・空間的に隔絶された自空間に設定されている理由・必然性は何でしょうか。

(藤井)

- ① 2-2での Braddock による買収の試みが失敗することに言及しておく必要がないだろうか。そうしないと「神=テクノロジー=人間的領域」という図式が Braddock の視点でしかないことが見えてこなくなる。
- ② Washington 家が George Washington 直系であることは、全体の論旨にとってどのような意味を持つてくるのか。

(本荘)

- ① 2-2 「神の買収」の章で「神を買収しようとした行為は正当化されるのではないのでしょうか」は、「ブラドック・ワシントンが神に賄賂を送ろうとしているのだ。」という行為が、経済的成功が機械化をもたらす→飛行機は機械化の象徴でもある→「神の力」である飛行機は機械でもある、と述べた後で、この章の締めくくりの文として最後に付け加えると、藤田さんの一番言いたいこと「神を買収しようとしたことは正当化されるのではないのでしょうか」が、説得力を持って迫ってくると思いますが、いかがでしょうか。私の解釈で合っているでしょうか。

- (9) 上西哲雄・藤田大憲・中野辰彦・井出達郎・藤井光・本荘忠大著「アメリカとは何か——ロスト・ジェネレーションに読む——」北星学園大学文学部編『文学部北星論集』第44巻第1号参照。